

アー ル R

2018

芸術学科の素顔をお見せします

講座名

芸術基礎・ことば

担当教員 平出隆・須山悠里

「ことばと思考」を
デザインに落とし込む

芸術学科では二〇一六年度から実技の必修科目が開講されている。「芸術基礎・ことば」もその一つだ。この授業は文字通り「ことば」をテーマにしており、哲学の世界に足を踏み入れつつ思考をことばに起こし、デザインに落とし込む。それらを通じて「ことば」とデザインや出版物の関係、ひいては「ことば」と芸術の密接なつながりを実感することができ。担当しているのは、書物設計ゼミの平出隆教授とデザイナーの須山悠里先生の二人。二限続きの授業を二人が「コマずつ受け持っている」。

昨年十月のある金曜日、朝九時に現場の取材に向かった。一限は平出教授の担当だ。詩人として活躍している平出教授の授業では「ことば」に哲学的なアプローチを図る。この日は学生たちが各自課題の進捗を発表していた。後期の課題は「アナロジーの絵本」。自分のよく知っている領域とこれから探究したい領域とのあいだに共通の仕組みを見つけ、見開きの絵本にまとめる。ある学生はよく知っている領域として「食パン」を、探究したい領域として「ネイル」を挙げ、両者で



使われている「練る」「待つ」「のせる」などの言葉に共通部分を見出した。「化学」と「日本語」とを挙げてそれぞれの領域のあいだに通じるものを見つける学生もいた。

「発表には情報を共有する効能もある」と平出教授は話す。学生たちは発表を通じて互いに自分とは異なる視点に気づくことができ

る。新たな情報が刺激になり、時には自分の制作物に影響を受けることもある。前期のこの時間には「葉書で哲学を贈る」という課題が出たそう。学生たちはそれぞれ自分で考え抜いた「哲学」をだれかに送り届ける。小さいながら現実を通過する葉書というメディアでの表現ゆえ、「ことば」や「デザイン」を選び抜かざるをえないのである。

二限の須山先生の授業では、エディトリアル・デザインを学ぶ。前期の課題は、北園克衛の詩を自分でレイアウトして冊子にすること。北園克衛の詩は、紙面上に文字が組まれることで、一つの作品として成立する。学生は詩を自分なりに解釈・解体し、再構成していく。その際にはパソコンで組版用のソフト「Adobe InDesign CC」を使用し、紙面をデザインする。書体の種類や大きさ、行間の取り方などによって、詩の雰囲気は大きく変わる。デザイナーとして数々の書籍や展覧会の広報物を手がけてきた須山先生の指導は極めて実践的だ。学生たちは、同じ詩を素材にしながらも多様な伝え方が存在することを知る。印刷、製本も自分で行い、できあがった冊子を手にする。ある種の達成感が湧き出てくるという。「技術的なこと以上に他者のことばに触れる思考のプロセスを大事にしてほしい」と須山先生は言う。それは出版物だ



けでなくすべての分野においても重要なことである。

座学を主とする芸術学科でクリエイターの経験ができるこの授業は貴重だ。ふだん特に意識せずに使っている「ことば」と改めて向き合い、見つめ直す機会にもなるだろう。

取材・文〓平田瑞穂、亀井えり

講座名

キュレイトリアル論

担当教員 家村珠代

学芸員を目指す学生を
世界の美術展にいざなう

本学芸術学科では、学科内の授業だけで学芸員資格を取得できるようカリキュラムが組まれている。実際、学芸員を目指して入学してくる学生は多数いる。そこで必要なのが「キュレーション」すなわち展覧会の企画・運営の能力だ。最近はネット上の情報を集めて編み直すことを指す言葉としても流布しているが、本来は博物館や美術館の世界の言葉

である。

キュレーションの力をつけるために開講された「キュレイトリアル論」の授業を担当するのは家村珠代教授。東京の目黒区美術館学芸員やフリーのキュレーターとして培ってきた豊富な経験を生かして、実践的な視点と鮮度の高い情報を持ち込んだ講義を行っている。

家村教授は、教室にいながらにして世界各国の美術展に学生たちを「連れて行って」くれる。ある日学生たちをいざなったのは、イタリアのベネチアだった。水の都として有名

「キュレイトリアル論」は、学芸員を目指す学生必須な授業の一つだ。日本国内のみならず、世界の美術展に目を向ける。美術に関する知識だけではキュレーターは務まらない。現役インディペンデント・キュレーターの家村珠代教授の臨場感あふれる授業である。

な北イタリアのこの都市では、現代美術の芸術祭「ベネチア・ビエンナーレ」が、二年に一度開かれている。百年以上の歴史を持ち、世界中の美術関係者が訪れることでも知られている。透明な床の下でパフォーマンス集団が無言の演技を繰り広げていたのは、昨年金獅子賞を受賞したというドイツ館。日本も専用の建物を持つていて、ずいぶん昔から参加している。今年は広島在住のアーティスト岩崎貴宏が、来場者が床の下から首を出して鑑賞するという驚くべき作品を出品していた。こうした展示法の解説を聞いていると、キュレーションとは何かということがとてもよく分かる。

家村教授は毎回、会場で実際に配布された会場地図を学生に一部ずつ配る。さらに、たとえばベネチアの中心地から会場に向かうまでの風景もスクリーンに映す。途中でパフォーマンスをしているアーティストがいたり、いかにも美味しそうなレストランがあったりする。おかげで、実際に現地を歩いている感覚を持つことができるのである。この授業を受けていると、美術は決して社会から浮いたものではなく、社会とともにあるものだということがよく分かる。学生の身で国外に飛ぶことは容易ではないが、この授業のおかげで、いとも簡単に現地の空気を吸うことができる。しかも、教室には実際に今年ベネチ



ベネチアの街並み。歴史を物語るような古い建物が並ぶ（写真提供＝家村珠代）

ゼミの扉を開く

「出身はどちらのゼミですか」。卒業して社会人になってからも、勤務先の社員や外部関係者からこんな風に問われることがある。本学に限らず、ゼミは大学教育の核心だ。国や大学から細かく指導内容を規定されているわけではない。担当する教授たちはそれぞれの分野と方法論を持ち、研究や調査から出版物の作成まで様々な指導をする。学生たちは自ら積極的に動き、喜びと苦勞を同居させながら成果を上げる。生きた現場がそこにはある。

本学には八つのゼミがある。装飾デザイン研究、展覧会企画、映像研究、文芸批評、美術史など内容は多岐にわたる。履修する三、四年生は卒業を見据えながら自分が何をやりたいかを改めて自問し、選択する。各ゼミでは具体的にどんな研究や活動をしているのか。本誌取材チームが現場を訪ねた。

私の運命の1

芸術学科の8人の教授たちは皆个性的で、豊かな人間性と知識を持ち合わせている。その一人ひとりに、人生の転機となった何かとの出会いがあったという。はたして運命を変えた〇〇とは何だったのだろうか。

家村珠代 教授

勤務していた当時の
美術館長の言葉



同時代を生きる作家と共に展覧会を作る

家村珠代教授は目黒区美術館の常勤学芸員になったばかりだった1995年に『戦後文化の軌跡展』を担当した。巡回した全国4館の学芸員や新聞社のスタッフ、美術史家など約20人からなる研究会が3年がかりで企画した展覧会だった。終戦直後からの50年を、美術・建築・デザイン・いけばな・映像・漫画など視覚文化全体で検証。メンバーは個々の研究成果を会議で発表、討議を繰り返した。時には外部の専門家に討議に加わってもらった。建築物などを自分たちの目で見歩くこともあった。その結果、展覧会の評判はよく、メディアにも取り上げられた。ところが会期が終わった後、当時目黒区美術館館長であり、新聞記者として戦後50年を知る加藤貞雄氏からこんなことを言われたという。「この展覧会は、僕の知っている50年とは異なるように思う」

ショックだった。メンバーの中には1945年当初からの日本の文化を実際に体験・目撃した者はいなかった。だから残された批評や文献を頼りにするしかない。だが、どんなに調べても残った文献自体に偏りは出てくる。

自分と同時代を生きる作家のことなら、展覧会の来場者に体験として自分の言葉で伝えることができるのではないかと考えた。それも作品を紹介するだけでなく、作家とともに展覧会をつくるのである。展覧会への取り組み方が変わり、青木野枝、小林孝亘、丸山直文、村田朋泰ら同年代の作家の個展を多く企画するようになった。

(文＝宮越大空)

西嶋憲生 教授

映画『リトアニアへの旅の追憶』

難民映画監督の眼差しに衝撃を受ける



映像、特に映画に関する膨大な知識を持ち、日々を映画鑑賞に費やしているという西嶋憲生教授。運命を突き動かしたのも、やはり映画だった。1973年5月、若き日の西嶋教授が新宿の紀伊國屋ホールで見たジョナス・メカス監督の『リトアニアへの旅の追憶』である。

第2次大戦中、一度はナチスドイツの強制収容所に入れられながらも脱走し、迫り来る脅威から逃れるために故郷のリトアニアを離れ、戦後も難民キャンプを転々としたジョナス・メカスは、1949年にアメリカへ移住し、難民映画監督となる。この作品は、言葉の通じないアメリカのブルックリンでの生活、終戦後27年ぶりに訪れた故郷での母や友人たちとの再会の記録、そして訪れたドイツやオーストリアでの映像などで構成された日記のような映画である。当時大学2年生で、すでに映画を自分の専門としたと思い、同人誌に批評なども書き始めていたという西嶋教授は、メカスが帰郷した際の主観的かつ前衛的な記録、そのプライベートな眼差しの直接性に衝撃を受ける。以後実験映画やアヴァンギャルド映画の研究を始め、それらを自らの映画人生の中心テーマと考えるようになったという。

(文＝平田瑞穂)

海老塚耕一 教授

マルセル・デュシャン

水辺にたたずんで作品の構想を練る

現代美術家の海老塚耕一教授が美術の道を志すようになったきっかけは、14歳の夏休みにさかのぼる。20世紀美術の代表的な作家であるマルセル・デュシャンとたまたま誕生日が一緒だったことで興味を持ち、作品集を眺めていたらページをめくるごとに惹かれる度合いが強くなっていったという。

架空の人物のサインを記しただけの既製品の男性用小便器を無鑑査の公募展に出品して拒否された逸話で有名な1917年の代表作《泉》のように、デュシャンは多くの疑問を人々に投げかける前衛的な作品を制作し、美術界に大きな衝撃を残した。海老塚教授はデュシャンとの出会いを「自分が考えていた常識的な思いとは異なったところにそれぞれの真実があるということを知られるできごとだった」と語る。作品を通じて世の中にさまざまな問題提起をする姿勢は、中学時代からずっと続いているのかもしれない。

(文＝青木真梨恵 イラスト＝鈴木勇佑)



小川敦生 教授

音楽評論家、吉田秀和氏の文章

受験勉強の中で起きた文章への目覚め

20世紀を代表する音楽評論家、吉田秀和氏のある文章が、小川敦生教授のその後の人生を変えたという。出会いは高校時代に遡る。大学の受験勉強をする中で解いていた国語の問題文に、その文章が使われていたそうだ。「音楽は人々の心の中に確固として存在する『石』のようなもの」といった内容のことが表現されていた。

小川教授はこの文章を読むまで、音楽こそが最高の芸術であり、文学や美術などの分野はもともと好んではいたものの、二番手以降になると感じていた。小学生の頃からヴァイオリンを習っており、毎日熱心に聴いていたクラシック音楽は芸術に限らず他の追従を許さない存在として心の大きな部分を占めていたという。

だが、吉田氏の洗練された言葉がその考えを変える。小川教授は文章にも音楽のような力が存在することを感じ、物書きの仕事がしたいと熱烈に思い始めたのである。大学卒業後、新聞記者や雑誌編集者への道を歩んだのも、この経験があったからこそだった。もっとも行きずりの出会いでもあったため、その文章がエッセイだったか評論だったか、どんなタイトルだったかはよく覚えていないという。

しかし、今でも大切な言葉として脳裏の片隅に居座り続け、「自分の支えとなっている」そうだ。長い時間の中で反芻を繰り返してきたその言葉は、小川教授の中でさらに成長しながら、まさに「石」のように存在し続けているのかもしれない。

(文＝加古ありさ イラスト＝小川敦生)





授業中のゼミ生の様子

たという。作品のポジティブな印象がネガティブな印象に変わってしまうことが分かる。こうした視点の移り変わりに着眼し、ポジティブとネガティブを組み合わせてボガティブという造語をタイトルにする展覧会を企画した」

こうしたテーマは、ゼミ室に学生がただ集まるだけでは出てこない。やはり最初は、作品を見て回ることから始めたという。さまざま

まな場所にあるギャラリーを訪ね歩き、さまざまな創造に出合う。作家たちは何を表現しているのかを肌で感じることは極めて重要だ。だが、その後のゼミ室の中での話し合いのときにも、まだいいアイデアは出てこなかったという。

「居酒屋でフランクに話した方がアイデアが出るのではないかとゼミ生で飲みに行った(編集部注…ゼミ生は全員成人です)。一人がネガティブなことをポジティブに言うという画像をネットで見つけ、話しているうちに「ボガティブ」という造語ができた。それがテーマになったのです」(青島)

ゼミを担当する美術家の海老塚耕一教授は、「慣習的なものの見方に流されずに、美術に関わるすべてのことについて常に疑問を持つ。そのうえで、考えの在り方をよく考えて新たな世界観を構築する。それが構想計画設計ゼミである」と話す。「ネガティブ」も「ポジティブ」も普通は特に疑いを持たずに使っている言葉だ。だが、実は世の中はそのように単純ではなく、両者が混在するような例は多い。美術作品を集めた企画展には、そうしたことへの問いかけが可能なのである。

構想計画設計ゼミには、もうひとつの大きな柱がある。セゾンアートプログラムへの協力をきっかけに始まった「あそびじゅつ」だ。目的は、美術を鑑賞する楽しさを子どもたちに伝えること。ゼミ生たちは、スタッフとして参加している。昨年八月二十一日に本学八王子キャンパスのTAUホールで開講された講座では、『夢を着てあそんだら、見えてきた!何が?』というテーマで、真っ白なTシャツを「夢」という形のないものを表現するカンバスに見立て、子どもたちにそれぞれの夢を五色の絵の具で描いてもらったそうだ。ピアノの鍵盤の上を五線譜が舞うように



2017年度の「TAMA VIVANT II」展では、7人の美術家の作品が展示されていた。タシロサトミの平面作品は愛用の革製品や着古した洋服を手がかりにしたという抽象絵画、槇野さやかガラス作品はまるで池の一部を四角く切り出したような立体、松浦延年は油絵の具と樹脂を混ぜて何層にも塗り重ねた半立体、矢成光生は東京の空を黄色い雲が覆った不思議な絵画、山本愛子は染料というはかない素材で幻想的な女性像を表現した平面。それぞれに「ポジティブ」と「ネガティブ」を読み解くのは、鑑賞の仕方としてもおもしろかった。写真右側の宇宙飛行士の形をしたのは、足立篤史の作品

構想計画設計ゼミ

慣習的なものの見方に流されずに常に疑問を持つ

企画展のテーマを熟慮して決める。

美術が社会の中で果たす役割が見えてくる。

子どもたちと美術で遊ぶ。

今度は子どもたちが美術とは何かを教えてくれる。

構想計画設計ゼミでは授業の一環として「TAMA VIVANT II」展という企画展を毎年開いている。二〇一七年度は、九月十一月に本学八王子キャンパス内のアートテーク・ギャラリーと東京・多摩市のバルテノン多摩の二箇所を巡回する形で「ボガティブ」という副題をつけて開催した。

九月下旬に訪れたアートテークの会場には、絵画、彫刻、ガラス工芸、陶芸などさまざまな技法の作品が並んでいた。台の上に小さな人形が載っているのが目に入る。近寄って見ると、それらは宇宙飛行士の形をしていた。足立篤史の作品だった。宇宙服の表面に文字らしきものが書かれている。実はこの彫刻、素材は紙である。しかもただの紙ではない。フランスの小説家ジュール・ヴェルヌの『月世界旅行』という本を使っているという。

文字の正体は、小説のページだったのである。ゼミ長で四年の青島綾音はあるギャラリーで足立の作品と出合い、際立ったユニークさを感じたという。電子書籍やタブレット端末が普及し、紙という素材が廃れる中で、「足立

の作品は紙であることが重要」と青島は言う。近くの床に、エネルギーが地面からむくむくと湧き出したような形の抽象的な立体作品があった。作者の張ビナは現在本学博士後期課程に在籍し、論文の執筆に取り組んでいる大学院生だ。素材は陶。樹木の生命力を表現しているという。大きさも素材も表現内容も、足立の作品と真逆であるように思える。それらが同じ展覧会で展示されているところが、特におもしろく感じた。

「ボガティブ」という展覧会の副題は何を意味するのか。青島に問うと、興味深い答えが返ってきた。

「私たちが作品を見るとときに、ポジティブとネガティブという二つの感情があるとする。たとえば、今回の出展作品である矢成光生の『Unknown City』は、ポップな色彩と細かく描きこんだ建物の描写からポジティブな印象を受ける。しかし、作品に近づいてよく見ると、原子力発電所や途切れた建物が描かれていることに気づく。作家本人によると、この作品は社会問題や環境問題を考えて描い



(上)「あそびじゅつ」にて。静寂な空気の中、海老塚教授が描く夢を興味深そうに見つめる子どもたち(昨年8月21日、本学八王子キャンパスTAUホール)
(下)「あそびじゅつ」で子どもたちが作った作品は昨年9月、本学八王子キャンパスのアートテーク・ギャラリーで展示された

担当教員

海老塚耕一 (本学芸術学科教授)

(えびづか こういち) 1951年神奈川県生まれ。多摩美術大学大学院修了。『第6回インド・トリエンナーレ』ゴールド・メダル、『第4回アジア・アート・ビエンナーレ』、パングラディッシュ』最優秀作家賞、第15回平櫛田中賞、『第19回サンパウロビエンナーレ』、『第19回現代日本彫刻展』神奈川県立近代美術館賞、FOCUS 2002『結界 海老塚耕一展』神奈川県民ギャラリー、高島屋文化賞、等々多数受賞。

描かれていたり、美味しそうなケーキと飲み物が並んだ喫茶店のような絵があったり、子どもたちの夢はどれも楽しそうだ。夢Tシャツができたら今度はそれを着て鬼ごっこをして遊ぶ時間になる。美術というのは本来こうして人々を楽しませるものだったことに気づ

取材・文・レイアウト 鈴木萌花
撮影 三好みはる、鈴木萌花

フィールドワーク設計ゼミ
雑誌づくりの現場を経験する

企画、取材、記事の執筆から誌面のレイアウトまでの雑誌づくりのすべての行程を、学生が手がけている。記事を書いているとしばしば文字数が多くなりすぎる。「原稿を縮めるのは、何が重要かを見極めたり、シャープな表現をしたりする訓練としてとても有効」と小川敦生教授は言う。

本学の銀杏並木が美しい黄色に染まり初め
 た頃、芸術学棟四階のフィールドワーク設
 計ゼミのゼミ室の扉を叩いた。このゼミで
 は、美術ジャーナリストの小川敦生教授の指
 導の下でアート誌『Whoops!』を年三回発
 行している。取材した日は『Whoops!』の
 二〇一七年秋季号が刊行される間近のタイミン



ゼミの時間にかかれた企画会議の様子

グだったが、休む間もなく二〇一八年冬号に向けた企画会議が始まるうとしていた。

「では会議を始めましょうか」

小川教授のこんなかけ声で会議がスタートした。企画会議では、学生一人一人が一枚の紙にまとめた企画案を全員に配り、順番にプレゼンをする。多摩美大と東京造形大の学生が共同でギャラリイとして運営している東京・町田の「minika」について取材する案を出したのは、三年生の板垣万由子さんだ。美大生の作品のほか、販売をわざわざ希望してくる作家もいるという。同じく三年生の青木真梨恵さんは、神奈川・横須賀の「飯島商店」という、古い民家を再利用して演劇を見せたり絵を展示したりする場所についての企画を提案した。そこで四年生の山田浩子さんから「古民家なら、町田の武相荘（ぶあいそう）もギャラリイのように展示をしていますよ」と新たな情報が付与された。小川教授は「白洲次郎・正子夫妻が暮らしていた家ですね」と一言。すると今度は板垣さんから「実はminikaも古民家の再利用なんです」との

声が出てきた。『古民家ギャラリー』の特集
ができますね」。小川教授がゼミ生たちのア
イデアを一つにまとめた。

一方、小川教授とゼミ生の意見がぶつかる場面もあった。小川教授は「この内容で、何か得られるものがあるのだろうか」と問いを投げかける。実際に社会で通用する媒体の制作を目標にしているので、「妥協はしないように心がけている」という。学生は自分の考えを丁寧主張しながら、企画内容の改善点を模索した。



『Whoops!』誌は学内の学生、毎年夏のオープンキャンパスや秋の芸術祭の来場者の手に渡るほか、全国のギャラリーの一部や青山ブックセンター本店などでも配布されている

企画会議を経て、学生たちは電話やメールで取材のアポイントを自ら取って話を聞きに出かける。戻ってくると今度は原稿執筆という大仕事が待ち構えている。新聞や雑誌で長年美術記者を経験、今でも頻繁に記事を書いている小川教授の指導の核心部分だ。ゼミ長の椋田大揮さんが苦勞を教えてくれた。「雑誌に載せられる文章の量には限りがありま

す。そこからどう縮めるかが難しいんです」。

『Whoops!』誌の場合、一ページに載せられる記事本文の文字量は一二〇〇字程度とい

う。しかし、取材した話を丁寧に書いていると、気づいたら二〇〇〇字くらいになってしまっているということが頻繁にあるようだ。

「原稿を縮めるのは、書いている中で何が重要かを見極めたり、シャープな表現をしたりする訓練としてとても有効です」と小川教授は言う。文字量の調整も、ただの作業ではなく「修業」なのである。

記事の執筆が終わると、次はレイアウトだ。見出し、本文と写真などを配置するレイアウトは、雑誌制作の醍醐味といえる作業だ。誌面の見栄えをよくするだけでなく、文章の読みやすさ、読者の目線の動き、記事内容と合わせた雰囲気作りなどにも配慮する必要がある。「きれいな配置にするのは難しい」とゼミ生たちは口を揃えて言う。時期が来るとパソコンと向き合う「Adobe InDesign CC」というレイアウト専用のソフトウェアを開く。写真の大きさや場所を1センチ変えるとすっきり見えるというケースもある。

『Whoops!』二〇一七年秋号の記事「小国
和紙×新潟の雪が生み出す伝統」で、執筆
した板垣さんは小川教授からレイアウトに関
してこんなアドバイスを受けたという。「見
出しにある『雪』の文字をうまく飾れない

か」。板垣さんはさまざまな飾り方を模索し、雪の形などをあしらった背景を見出しの裏に敷いた。雪を利用した日光の照り返しが紙を白くするなど、雪に関する記述は記事の核心部分でもあった。記事とレイアウトの重要な関係を学ぶ経験にもなった。板垣さんは雑誌づくりについて、「文章と写真を組み合わせる、一つの作品を完成させるイメージです。取材を通して普通は接することがないような経験をし、いろいろなことを知ることができます。雑誌制作の全部がやりがいです」と話す。

フイールドワーク設計ゼミでは、『Whoops』誌の制作作業を通して学生たちは自ら企画を立て、自分の足で取材に出かけ、うんうんとうなりながら記事を書き、レイアウト作業によって形あるものに落とし込む。「自分が書いた原稿が雑誌の一ページになること自体に感動します」と言う椋田さんの言葉にはそのすべてのことが凝縮されているのではないかと思った。

取材・文Ⅱ戸谷莉維裳

レイアウト Ⅱ 加古ありさ

撮影Ⅱ加古ありさ、戸谷莉維裳



担当教員

小川敦生 (本学芸術学科教授)

(おがわ・めつお) 1959年福岡県生まれ。東京大学文学部美術学科卒。日経マグロウヒル社(現・日経BP社)入社。週刊「日経エントナメント」誌記者としてクラシック音楽と洋楽を担当。その後、月刊「日経アート」誌編集長を経て日本経済新聞社文化部に。『美の美 ハロー・クレイ 色彩と線の交響楽』『美の美 画鬼、河鍋曉斎』『瀬戸内芸術祭写真で巡る「島とアート海の旅」』など多くの記事を執筆。2012年本学芸術学科教授に。現在も、日本経済新聞のコラム「美の粹」や日経ビジネスオンラインのコラム「小川敦生のあーとカフェ」等の執筆を続けている。

『Whoops!』Vol.15（2017年冬号）に掲載された記事『特集「アートの壁／岡岡球子の陶板壁画はこうして移設された」』のためにサンシャインシティの川島誠二郎さん（左）を取材しているゼミ長の椋田大揮さん

展覧会設計ゼミ

唯一無二の展覧会を創造する。

作家と向き合い、作家とつくる展覧会。

忙しい時の流れと苦労の上に成り立つ。

そこで決して欠くことができないのがキュレーターの存在だ。

この年の展覧会設計ゼミは、まったく新しい展覧会を創造した。

本学八王子キャンパスの正門を入って緩やかな坂を上がり、メインの通りに沿って左に曲がると、アートテークと呼ばれる建物が見えてくる。この建物に入っているギャラリーは、家村珠代教授が担当する展覧会設計ゼミの活動場所の一つである。普段は芸術学棟で座学に励んでいる学生たちが、ここではキュレーターに変身する。

昨年十月、同ゼミは『高柳恵里×高山陽介×千葉正也』展をここで開いた。三人の美術家は揃って多摩美出身だが、発想も表現技法もまったく違う。しかし企画展のコンセプトを知って、とても斬新な試みをしていることが分かった。「招聘した三人の作家の間で構想を交換することで、事後、テーマ性が生まれてくるような展覧会を目指した」という。つまりこの展覧会は、まったく異なるベクトルを持つように思える三人の作家が交わり、混じり合う場として、そのあり方を模索した賜物だったのである。はたしてこんな試みは、世の中にどれくらいあるのだろうか。あるいは美大生の運営だからこそできる実験的な展覧会ともいえそうだ。はたしてどんな展覧会が実現したのか。



(上) ゼミ室の風景
 (中) 『高柳恵里×高山陽介×千葉正也』展設営風景
 (下) 千葉正也《吐き頭》を壁に設置しているところ

高柳恵里の出品作の一つ《吐き頭》は、何の変哲もないサラダの写真だった。作家がいつものように朝食を食べようとしたときに突然「カメラを介入させて」撮った写真という。日常の風景をかしこまった作品として見るのは、戸惑いを伴う不思議な体験だった。高山陽介は、マットや布の上に横たわって鑑賞できる立体作品を多く出品していた。それぞれの作品はノミで彫った木彫を空き缶などと組み合わせており、高さはそれぞれ二〇センチほど。寝転がって見ると、作品との距離感や意識の開放感が変わる。決して広くはない反面、吹き抜けが特徴であるアートテークの間を、見事に使いこなしている。千葉正也は油彩画を数点出品。具象画なのだが、どの作品にも不思議な空気が漂っている。たとえば

《吐き頭》。白い人物の頭像のようなものの頭頂にじょうごが刺さっており、二方向からひしゃくで食材のようなものが注がれている。そして口からは食材を吐いているのである。錯誤感が楽しく、一度見始めると妙にはまってしまふ作品だった。三人の作品は、技法も作風もまったく違っていたにもかかわらず、常識へのあらがいのという共通点があるように感じた。



高山陽介の木彫の作品と、高柳恵里の電飾作品の展示風景

担当教員

家村珠代(本学芸術学科教授)

(いえむら・たまよ) 東京都生まれ。東京藝術大学大学院美術研究芸術学専攻博士課程修了。インディペンデント・キュレーター。1991～2009年目黒区美術館学芸員。手がけた企画展に『1953年ライトアップー新しい戦後美術像が見えてきた』展(1996年、目黒区美術館)、『小林孝亘展ー終わらない夏』(2004年、目黒区美術館)、『家村珠代連続企画*ひとり』Vol.1. 袴田京太郎展(2005年、GALLERY MAKI)、『丸山直文展ー後ろの正面』(2008年、目黒区美術館)など。



取材・文・撮影 〃
 宮越大空、黄夢圓、小林りの
 レイアウト 〃 小林りの

だけでなく設けた。作家同士の交流の場も設け、互いの考えをぶつけあう機会を作った。その結果、作家との距離が非常に近い展覧会になったという。

作家を主軸にしても、キュレーションの業務はそれほど減るわけではない。スケジュールの策定、予算案の作成、プレスリリースやフライヤー作り。一つの展覧会を運営するのに、どれほど多くの作業があるのか。ゼミ生たちは身をもって経験する。

「最も苦労したことの一つが広報作業でした」とゼミ長で四年の長田詩織さんは言う。作家に委ねる部分が多かったこともあり、フライヤーやポスターを作り終える必要がある七月の時点では全体のイメージがまだ固まっ



作品を梱包した箱のチェックシート

ていなかった。そのためデザインに使用できる要素はかなり限られていた。ゼミ生たちは討議の末、いわゆる「青写真」をメインのモチーフとして使うことにした。「未定の未来」をイメージしたから」という。一般に「青写真」という言葉は将来設計を描く場合などに比喻として使われる。逆比喩とでも言うべきしゃれた発想である。フライヤーやポスターはゼミ生が「足」を使って街のギャラリー等をまわり、置いてもらえるよう交渉する。たまたま訪れた来廊客に配ることも忘れない。

ゼミを取材して分かったのは、展覧会を企画するということがまるで土台から家を建てるような作業だったことだ。二年間このゼミで活動してきた長田さんは、「アーティストと直接関わるのが一番楽しい。新たな発見ができるんです」と話す。アートはいつも新しい刺激を与えてくれる。アーティストはその発想源。出会ったことはおそらく一生忘れないのではないだろうか。

映像文化設計ゼミ

触れた映画の数だけ新たな好奇心が生まれる

映画祭などに足を運び、とにかくたくさんの映画を見る。
学生たちの仕事は、自分自身で映画を味わうことだ。
学生たちが企画する上映会は、日々の体験を生かす場所である。
鑑賞者と企画者の二つの立場から、映画の可能性を探り続けている。

映像文化設計ゼミは授業の一環として、自主企画の上映会『金曜・cinemaque』を開いている。昨年十二月には、装飾デザイン調査設計ゼミと合同で、劇場公開中の長編アニメーション『ブレndanとケルズの秘密』（トム・ムーア監督）を上映した。ケルト文化の精華としてアイルランドに残っている聖書の装飾写本『ケルズの書』の成り立ちを、史実と空想を織り交ぜながら描いた作品である。この映画を配給しているチャイルド・フィルムの工藤雅子氏の教育に配慮した計らいで、本学での上映が実現した。上映後、映像文化設計ゼミの西嶋憲生教授と工藤氏、装飾デザイン調査設計ゼミの鶴岡真弓教授が作品とその文化的背景について語り合うトークタイムがあった。『ケルズの書』とはどのようなものなのか。まず、ケルト文化に造詣が深い鶴岡教授が詳しく解説。書籍でありながら手作りの工芸品ともいえるこの本の存在に、改めて感銘を受ける。映画には、人々の生活を脅かすバイキングが登場する。西嶋教授はこのキャラクターについてこう言及した。



上映会の受付準備をするゼミ生たち

「ここでは怖い存在、悪役として描かれています。交易の発達に貢献したという一面

も持ち合わせています」

作品上でデフォルメされた人物像と実際の歴史の違いを知ること、映画の見方が変わ

る。監督の手柄や配給の裏話なども聞くことができた。映画の背景を多様な角度から理解するまたとない機会だった。

通常のゼミ室での授業は、教授と学生たち

による談話から始まる。昨年十月、取材に訪れた日の最初の話題は、少し前にゼミ旅行で出かけた山形国際ドキュメンタリー映画祭のことだった。二年に一度山形市で開催される、ドキュメンタリー映画に特化した映画祭である。

中国の出稼ぎ労働者家庭の食卓風景を描き出した『また一年』（中国）、経済成長が著しいインドの巨大な紡績工場の厳しい現実を映した『機械』（インド）など世界中の千本以上の作品から選ばれた「コンペティション」作品、中国の監督による「選挙に出たい」など日本を今の視点で捉えた映画が上映される「日本プログラム」など、この映画祭では多くの話題作を見ることができるとい

「選挙に出たい」は日本の選挙の実態を教

えてくれる」「葬儀社に勤める移民労働者がスイスからイタリアへ遺体を搬送する『カラブリア』は現実味があった」と学生たちは気に入った映画を挙げて、内容や気に入った理由を話す。学生たちの感想を受けて、西嶋教授もいくつかの作品の感想を聞かせてくれた。さらに、「同じ映画祭でも、良作が多い年もある、そうでない年もある」と言う。話題は自然に映画祭の現状へと移行し、学生たちは教授の話にじっと耳を傾ける。「東京国際映画祭はフリーパス制度がなくなったので、一作品ごとにチケットを取らなくては

けない。山形の映画祭ではその手間がなく、一日中見たい作品を好きなだけ見ることが

できます」。学生たちは、今度は映画祭のあり方について考えることになる。

三年生の鳥越雛子さんはたくさん

見ているうちに、「映画の中に登場する音楽や美術、ファッションに興味を持った」と話す。



上映会のアフタートークの様子。
左から、工藤雅子氏、西嶋憲生教授、鶴岡真弓教授



上映会に観客が集まり始めた様子



山形国際ドキュメンタリー映画祭の会場風景

担当教員

西嶋憲生（本学芸術学科教授）

（にしじま・のりお）1952年東京生まれ。東京大学文学部中退。美術出版社芸術評論賞入選を機に、70年代後半から映画・映像の研究



「流行の波が見えるのがおもしろい。撮影方法などの技術的な面以上に惹かれます。六〇年代前半にビートルズの音楽が映画に登場し、後半はアメリカン・ニューシネマの台頭に伴ってロックが使われるようになった。七〇年代は癖の強い美術が印象的」

取材・文・撮影・レイアウト＝井上寿々子



山形国際ドキュメンタリー映画祭の会場風景

装飾デザイン調査設計ゼミ

言葉と紙によるお互いの「批評」が
学生たちを育てる

イスラム建築、児童文学、日本近代絵画など

学生たちはさまざまなテーマで研究発表をする。

毎回配布される「批評ペーパー」でお互いに助言しあい、
学生たちはお互いに活発に意見交換し、高め合う。

装飾デザイン調査設計ゼミでは、ケルト文化研究の第一人者で美術文明史家の鶴岡真弓教授のもとで、学生たちがそれぞれのテーマを研究し、発表している。毎回ゼミでは全員に「批評ペーパー」というシートが配られ、発表が始まる。その日の発表のためにゼミ生全員が、発表のタイトル、方法、内容について意見を書き込み、発表後、紙を読んだ発表者はそれぞれに返事を書く。「学生同士、大いに成長の助けになる（批評）の鍛錬でもあるのです」と鶴岡教授は言う。

ゼミでは活発な言葉のやりとりも行われる。学生たちの顔は真剣そのものだ。取材をした日の発表者は三人。一人目は三年生の戸部瑛理さんだ。テーマは「女性のための女性像」岡田三郎助と近代日本の美人イメージ」。洋画家、岡田三郎助の作品と、明治末期から昭和初期の憧れの女性イメージについて発表した内容だった。戸部さんは、前期の研究では日本女性の白肌志向の変遷を、化粧文化史の観点で、古代から現代までたどった。全員から批評してもらうことで新たな問題を発見し、研究がさらに発展する。これ

が、発表の機会が複数回あるこのゼミの醍醐味だ。

二人目は三年生の小早志理香さん。テーマは「児童文学について」。前期は、フランスの絵本作家、エロール・ルカインの「絵本」について研究した。今回のテーマは、児童文学の歴史や定義について理解するためだという。「一般的に児童文学という言葉は何を指すのか」という内容からはじまり、児童文学の定義、子ども向けに「選ばれる」本と子どもが「選ぶ」本との傾向の違い、児童文学における分類など、細やかに調べ上げた成果が発表された。

最後は三年生の増田有為さん。テーマは「イスラム建築についてーハギアソフィアのイスラム建築様式を中心にみる」。増田さんは、「ハギアソフィアにおけるイスラム教化とキリスト教文化の共存に目を向けてきたが、研究を進めるにつれ、イスラム芸術自体に魅力を感じるようになった」と言う。「ハギアソフィア」はトルコの首都イスタンブールにあるモスクで、壮麗なイスラム建築として名高い。増田さんは内部装飾に焦点を当て

て研究をしている。だが、ハギアソフィアは建築的研究が多数を占めているため、いい参考文献がなかなか見つからないという。発表後、そのことについて鶴岡教授がアドバイスを送った。おすすめの著者や、関連書籍が多く配置されている本学八王子図書館内の区画、そして研究テーマにピンポイントで関連する書籍の数が少ない場合の検索方法などを丁寧に指導していた。

各発表後の意見交換の中で面白かったのは、発表者の盲点をつく展開が多かったことだ。発表の中では触れられていなかった人物や芸術様式、ある文化圏の歴史に関連性を見出し、発表者に質問を投げかけるのだ。一人で研究していると、どうしても視野が狭く、内容が偏りがちになる。このゼミの「開かれた場」で互いに批評をし合うことで、欠点を補うことができるのだ。

研究対象の範囲が広すぎて絞りきれない場合にも、意見交換は有効だ。この日の発表では、各発表者は掲げたテーマをさまざまな視点でバランスよく研究しており、充実した内容になっている。しかし、さらに深く研究を進めるためには、範囲を絞り込んでいく

必要がある。批評者側の学生が発した「あなたは特に、どこに最も興味をもっているのですか」という簡潔な一言が、発表者が研究内容、そして自分自身を見つめ直すきっかけになっていたのがとても興味深かった。

このゼミでは、映画の上映会やゲストを招いたトークショーも開催される。ある授業では、「無限創造の始まり（ゲネシス）」と題して、鹿児島市の障害者支援施設、しょうぶ学園の園生が制作した工芸品や絵画などの作品について鶴岡教授が解説した後、「しょうぶ学園」の日常を取材したドキュメンタリー映画『幸福は日々の中に。』が上映された。

映像文化設計ゼミと合同で開いたのは、アイルランドのアニメーション映画『ブレンダとケルズの秘密』上映会。ケルト文化の粋といわれる聖書の装飾写本『ケルズの書』の成り立ちを描いた作品だ。配給元のチャイルド・フィルムズの工藤雅子代表取締役、映像文化設計ゼミの西嶋憲生教授、鶴岡教授の三人によるトークが新たな刺激をもたらし、ゼミ生たちは貴重な時間を過ごしていた。

取材・文・撮影〓藤井奈穂



授業の終わりに撮った集合写真。手前の3人の学生が手にしているのは、発表のために準備したレジュメ

担当教員

鶴岡真弓 (本学芸術学科教授)

(つるおか・まゆみ) 本学芸術人類学研究所所長。美術文明史家。早稲田大学大学院修了後、アイルランド・ダブリン大学トリニティ・カレッジに留学。ケルト芸術文化&ヨーロッパ・中央アジア・日本に至る「ユーロ=アジア世界」の装飾デザイン交流史を研究。著書に『ケルト/装飾的思考』『装飾する魂』『装飾の神話学』『ケルト美術』『ケルトの歴史』『阿修羅のジュエリー』『すぐわかるヨーロッパの装飾文様』、訳書に『ケルズの書』など多数。ドキュメンタリー映画『地球交響曲・第1番』でアイルランドの歌姫エンヤと共演。



担当教員

安藤礼二 (本学芸術学科教授)

(あんどう・れいじ) 1967年東京都生まれ。文芸評論家。早稲田大学卒業。2002年、『神々の闘争－折口信夫論』で群像新人文賞評論部門優秀作を受賞し、日本近代思想史、民俗学をベースに評論活動を始める。06年、『神々の闘争－折口信夫論』で芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞。09年には『光の曼陀羅 日本文学論』で大江健三郎賞・伊藤整文学賞を受賞。14年に刊行した『折口信夫』が、翌年第13回角川財団学芸賞と第37回サントリー学芸賞を受賞した。2017年4月、本学学科教授に就任する。



のゼミ生は好奇心いっぱいに眺めている。次に、現像する時に光を当てることでモノクロ写真の明暗を反転させるソラリゼーションに言及。「これにより線を柔らかに表現することに成功した」。マン・レイは常に「写真とは何か」考え続けた作家だったことが、服部さんの発表でよく分かった。

安藤教授は補足説明をしたり関連事項を挙げたりすることで、より深い理解へと導く。

「ブルトンは『ナジャ』という小説の中で、カメラは人間の意識が入り込まないものであると言っている」「人に撮ってもらった自分の写真を見て、こんな顔をしてたかと思えない。不思議に思うのは、そこに自分の意識が入っていないから。普段鏡で見ている自分の顔には、どうしても自分自身の意識が入り込んでしまっている、頭の中で像が補正されているんです」

教授の説明はとてもわかりやすい。聞いて



采女まつりが行われる猿沢池で教授の説明を受ける

いると、一人で勉強していても気づかなかったこと、さらには思いも及ばなかった分野との関係性が見えてくる。

ゼミでは発表のほかに、ゼミ生がそれぞれ調べて考えたことについて一万二千字の論文を書く。かなりの量だが、卒論執筆の練習にもなるからとゼミ生たちは積極的に取り組んでいる。そして全員分の論文を『EXPRESSION』という一冊の書籍にまとめる。二〇一六年度の同書を見ると「リアリティ再考―物語という仮構と異化される現実」「仏像の髪型研究 螺髪（らう）の起源を探る」「キャッチコピーにおける言葉の力とその物語性」など、幅広い分野・視点による興味深いテーマが並んでいた。その多様性は、安藤教授の視野の広さをそのまま反映しているのかもしれない。ゼミ生たちも、必要以上に束縛されることがなく、自由な気持ちで執筆に臨むことができているようだ。

夏休みは、毎年ゼミ旅行に出かけている。日本の聖地を巡る旅だ。昨年夏は奈良県の天理教の本境地や寺院、仏閣を訪れた。三月にお水取りという祭りが行われる東大寺の二月堂。お祓いを受け、首に鈴をつけないで入れないような神聖な場所もあったという三輪山の三輪山神社などを安藤教授の説明を受けながら巡った。

ゼミを取材する前は、安藤教授が熱心に取り組んでいる民俗学を研究するイメージが強かった。しかし、「多摩美の中での芸術学科の立ち位置と同じく、多種多様な分野を研究するのが芸術学科におけるこのゼミです」とゼミ生たちは口を揃える。「興味のあることを研究できることに惹かれてこのゼミを選んだ」というゼミ生もいた。休憩時間に入ると談笑が始まり、和やかな空気がゼミ室に満ちる。魅力的なゼミである。



取材・文：亀井えり、鈴木勇佑
レイアウト：鈴木勇佑

猿沢池で入水した女性の話が紹介されている



采女まつりに関する話が書かれている

薬師寺の案内図とその前で教授の説明を受けるゼミ生



昨年十月のあるうららかな午後。芸術学棟四階にあるアーカイヴ設計ゼミのゼミ室に入ると、学生たちはお菓子を食べていたり、ソファに座っていたり。おのおのくつろいでいた。しばらくして入ってきた安藤礼二教授が、「時間きつかりに始める授業というよりは、人がだんだん集まってきたら流れで始める。いつもこんな感じなんだよね」とにこやかに話す。

やがて、ゼミ生の発表が始まった。この日の発表者は、四年生の服部芽生さん。テーマは、画家、彫刻家、写真家、そして映画制作者として主にフランスで活躍した二十世紀の作家マン・レイとその写真作品について。一八九〇年、アメリカのフィラデルフィアで生まれたマン・レイは創作期間の大部分をパリで過ごす。二十世紀前半の美術界を席巻したアヴァンギャルドな美術の潮流、ダダイスムやシュルレアリスムの中心人物の一人である。

「マン・レイはさまざまな技法を生み出した作家です。まずは、レイオグラフ。印画紙の上に直接物体を乗せ、光を当てることで物体の形を焼き付ける方法です」



薬師寺にて

ゼミ生はそれぞれテーマを決めて文献を読み、考える。分野にかかわらずテーマは自由に決めることができる。成果を発表して、ほかのゼミ生と問題意識を共有する。

安藤礼二教授のアドバイスは、新たな視点を与えてくれる。

自由なテーマで発表し、論文を書く

アーカイヴ設計ゼミ

服部さんはこんな話をしながら、この発表のために持参したレイオグラフの実物をゼミ生たちに見せた。白黒でコントラストのはっきりした写真に、くっきりと被写体が写っている。カメラを使わない写真の実物を、ほか

書物設計ゼミ

本を創造し、本の在り方を見つめる

出版物を多面的に捉え、その可能性を考える。

書物設計ゼミでは本を単なる情報媒体とは捉えていない。

装幀やフォントの使い方によって伝わり方も変わってくる。

あるときは美しい芸術作品にさえなる。

ここは「本」の持つすべての魅力を研究する場所である。

芸術学棟三階から螺旋階段を上ると、すぐ目の前に白いカーテンに閉め切られた教室がある。平出教授が担当している書物設計ゼミの教室だ。ところが、カーテンをめくると、ゼミ室というにはいささか違和感を覚える光景が現れる。大きな三台の印刷機があり、壁伝いに置かれた本棚には独創的で壮麗な装丁の本が隙間なく差し込まれ、机上には綺麗なフォントを印刷した紙が山積みになっているからだ。本を造るアーティストのアトリエ、あるいは美しい本を制作する出版社と形容した方がしっくりくるような室内である。

平出教授はこうい、『via walnuts 叢書』という、封筒に二枚の紙を入れる手紙の形式をとった書籍のシリーズを出版している。中に載せる文章はもちろんのこと、装幀もすべて自ら手掛けている。長年の試行錯誤の末、行きついた形だという。文章だけでなく、外側まで作り上げたいと造本にまでこだわるのは、究極の書籍造りを目指したことの表れだろう。

さて、その平出教授が率いる書物設計ゼミでは、三年生が二〇〇二年から毎年『10の図

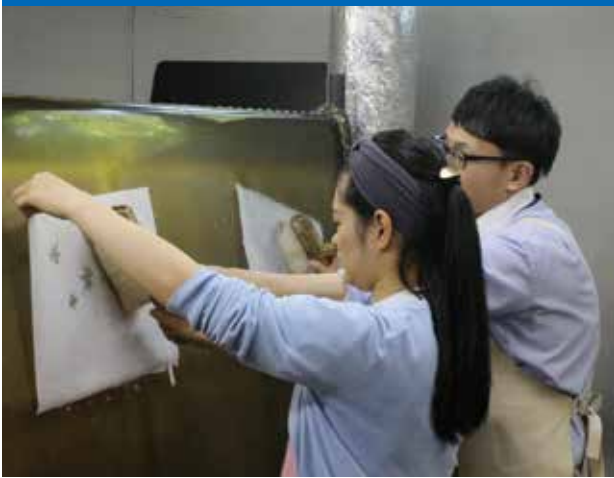


書館』という書籍を刊行している。自宅の本棚にあった十冊、妖怪に関する本十冊など、各々が選び出した十冊の本についてコメントし、それらをまとめて一冊の本にするのである。書評を書く人もいれば、選んだ理由を書く人もいるなど、学生は自由なアプローチをしている。それゆえ、一冊の本として完成した『10の図書館』はその内容、バリエーションに豊かさや面白味を持っている。また、中身に限らずその装幀にも趣向は凝らされており、その年々で個性的な顔つきの『10の図書館』が生まれている。そういったゼミ生の本

へのこだわりや垣間見たのは、昨年十月の中頃に訪ねたゼミ室のことだった。教室の奥に置かれたパソコンの画面を二人の学生が覗きながら、「の」という字の形態、フォントの印象について熱心に語り合っていたのだ。一文字ですら、本を造り出す上で大切な要素であるというゼミ生の気概を感じさせる。

「個人の仕事もちろんだが、全員で組版について話し合ったり、デザインを決めたりするのでチームワークも大事」

制作するうえでの学びを三年生の今尾日和子さんはこんな言葉で話してくれた。平出教授は学生たちの取り組みを見守りつつ、レイアウトのアドバイスをする。ゼミ生は「Adobe InDesign CC」というレイアウト用のソフトウェアを駆使して制作を行うが、行間や文字列のズレ、フォントなど文章を読んでいるだ



昨年6月のゼミ旅行で紙漉き体験をする学生たち（写真提供＝書物設計ゼミ）

けでは気がつかないような小さな点にまで厳しく修正の指摘をする。本を造る上ではどんな細部まで妥協しないことがわかる。さすが書物を設計するゼミだと感激した。「こうした取り組みを行うことで、実践的な力と装幀や活字と向き合う鋭敏な感覚を身につけられる」と四年生の森大河さんは語ってくれた。授業時間中は真摯に制作と向き合っていたゼミ生たちも、休み時間に入り、ひとたび日常に戻れば和気あいあいとして他愛ない会話を弾ませている。話を聞けば、このゼミには詩や物語、装幀デザイン、活字などに興味を持っていたり、本を媒体ではなく立体物として捉えたりすることが好きな人が集まっているようだ。卒業生には、ブックデザイナーとして活躍する人も多い。現在、「芸術基礎・ことば」の授業を平出教授と一緒に担当している装幀家の須山悠里先生も、このゼミの出身だ。昨年六月のゼミ旅行では岐阜へ赴いた。ゼミ生たちは美濃で紙漉き体験を行い、素材への知見を深めたという。

書物設計ゼミにおいては、本は単に文章を読むための媒体ではない。ある時は哲学的研究の対象、またある時は美しい芸術作品であり、様々な顔、性質を持つものとして捉えている。紙媒体に限らず、電子書籍化などにも取り組むなど、これからの「本」の可能性や変化を見据えているようである。また、書物を研究するだけでなく、そうした学びを生かして字のフォールム、ローマ字やひらがなの使い方などで変わる言葉の微細なニュアンスの違いを感じ取りながら、一から本を作り上げていくゼミ生にはクリエイターとしての一面をも感じることができた。

取材・文・撮影（*）・レイアウト
|| 大城美月

担当教員

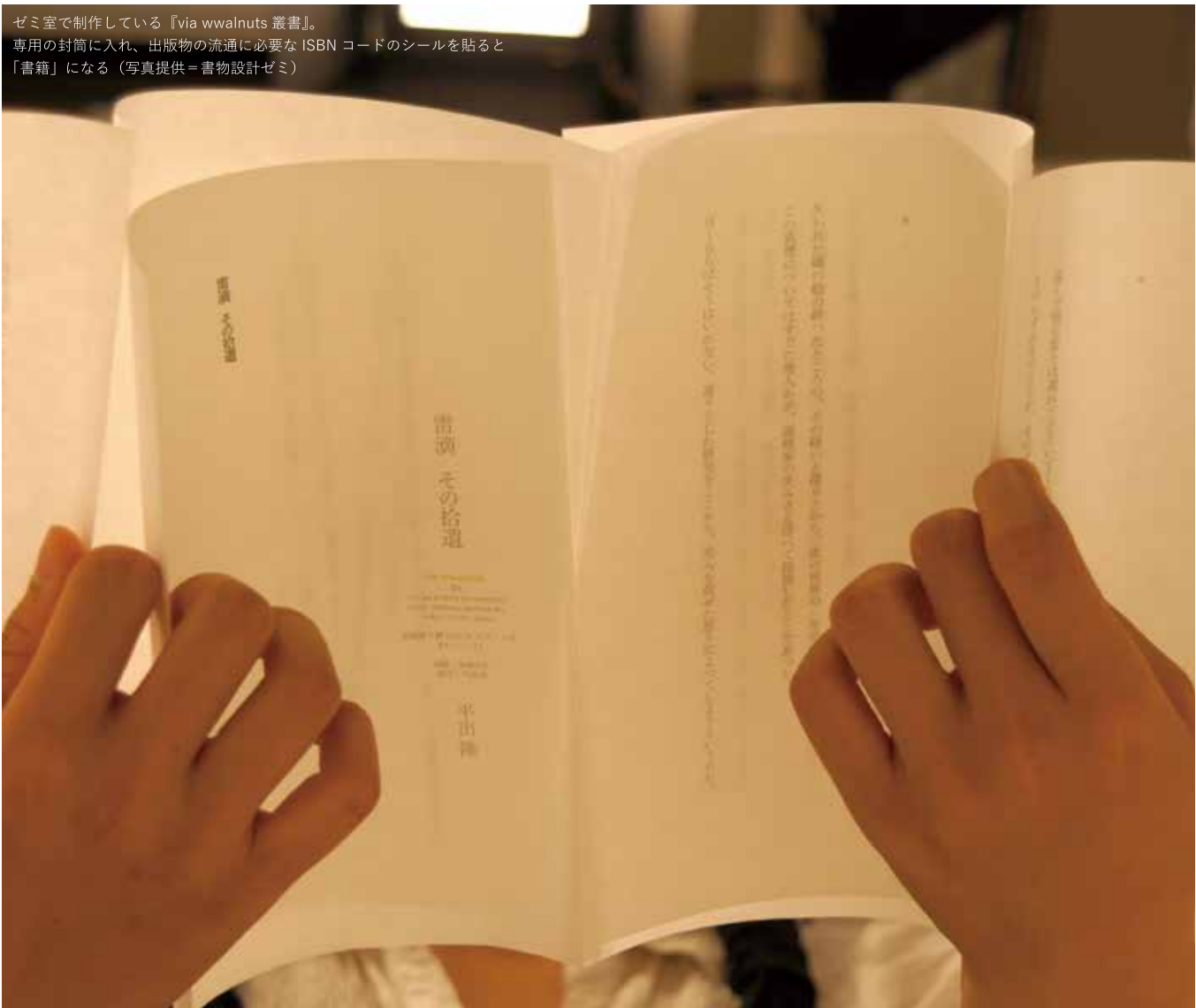
平出隆（本学芸術学科教授）

（ひらいで・たかし）1950年福岡県生まれ。一橋大学卒。詩人・作家・批評家。その詩は散文の領域に及び、『胡桃の戦意のために』（芸術選奨文部大臣新人賞）、『左手日記例言』（読売文学賞）、『猫の客』（木山捷平文学賞、NewYork Times Bestseller、Sunday Times Bestseller）、『ベルリンの瞬間』（紀行文学大賞）、『伊良子清白』（芸術選奨文部科学大臣賞）自装で造本装幀コンクール経済産業大臣賞、ライブソイビ・ブックフェア「世界で最も美しい本」賞候補）など多彩。伊良子清白関連全業績で藤村記念歷程賞。



昨年10月8日に神奈川県鎌倉市で開かれたかまくらブックフェスタで平出教授の作品『空中の本へ』を鑑賞する参加者たち（*）

ゼミ室で制作している『via walnuts 叢書』。専用の封筒に入れ、出版物の流通に必要なISBNコードのシールを貼ると「書籍」になる（写真提供＝書物設計ゼミ）



担当教員

本江邦夫 (本学芸術学科教授)

(もとえ・くにお) 1948年松山市生まれ。小中学校時代のほとんどを北海道で過ごす。76年東京大学大学院修士課程修了。同年東京国立近代美術館に入り、マティス、ルドンなどの回顧展を手がける。他方、『黒田アキ』展、『辰野登恵子』展など、現代美術にも意欲的にかかわる。98年多摩美術大学に転じる。主な著書に『●▲■の美しさって何?—20世紀美術の発見』、『絵画の行方』、『オディロン・ルドン』など。中学生の頃に「ペンちゃん」と唯一のあだ名がつけられてからペンギン愛好家である。



の印象派は知っていてもイタリアの未来派には馴染みがないという学生は、美大でも多い。作家たちは機械文明のどんな部分を絵画でどう表そうとしたのか。後の時代にどんな影響を与えたのか。こうした時代背景を踏まえて翻訳に臨む経験を積むことで、美術そのものの理解も深くなる。原書講読は、その格好の手段なのである。

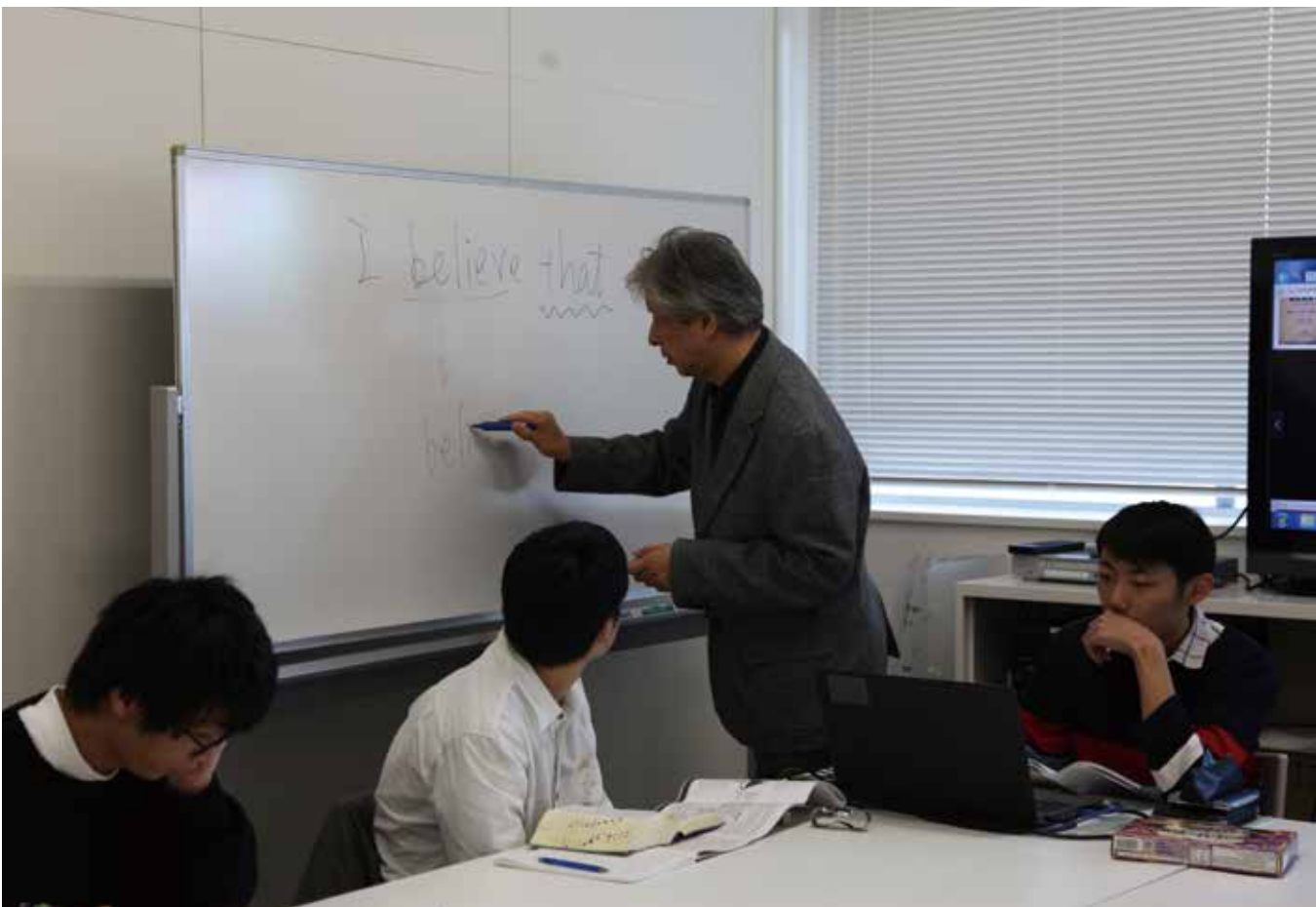
四限は研究発表の時間だ。一回の授業で二人のゼミ生が発表する。テーマのジャンルは自由で、各々が興味のままにテーマを設定できる。この日の一人目は、四年生の伊藤結希



本江教授の元にはペンギングッズが集まるそうだ

さん。テーマは「フランシス・ベーコンの作品と鑑賞者の関係性について」だった。伊藤さんがベーコンの作品におもしろさを感じたのは、二〇一三年に東京国立近代美術館で開かれた回顧展で作品を鑑賞したときだったという。具象的な人物像に表れる独特なゆがみが妙に心を捉える。ベーコンはそんな作家だった。伊藤さんは、鑑賞者が作品を見ているのと同時に、作品の側にも鑑賞者に働きかける何かがあるのではないかということに思い至り、作品と鑑賞者の双方向性について研究を始めた。発表時には回顧展の図録を用意してゼミ生の間で共有するなど、理解を得るための準備も怠らない。

二人目は同じく四年生の草野明日香さんが研究している「ブーシェとルモワヌ」の発表だった。ベルギー出身の二十世紀の画家ポール・デルヴォーの女性の白い裸体作品をきっかけにフランス美術に興味を持った草野さんは、十八世紀フランスの「ロココ」の美術様式を調べるうちに、ブーシェの優雅な画風に目がとまったという。ブーシェの師であるルモワヌからブーシェへの影響について調べ、関連作品をパソコンにつないだディスプレイに映し出して大きく見せていた。二人



4限は原書講読、5限は研究発表。どちらの時間にも、質問や意見が飛び交う

美術史設計ゼミ

美術史の原書を読み、

思い思いのテーマで研究発表をする

「よく学び、学び、よく遊べ」をモットーに、

美術と自然体で接するための素養を学ぶ。

三限の原書講読では英語の美術史書の読解に挑み、

四限の研究発表ではプレゼンテーションの基礎的な力を身につける。

ここでの研究内容をそのまま卒論のテーマにする学生も多いという。

芸術学棟四階の一番奥に、毎週月曜日の三、四限に授業をしている美術史設計ゼミのゼミ室がある。昨年の秋の某日、ゼミ室を訪ねると、ゼミ生たちが白い机を囲むように座っていた。真ん中には旅行土産のクッキーが置かれており、くつろいだ雰囲気の中でゼミ生たちは談笑していた。厳めしい印象を抱いて取材に臨んだが、どうもそこまで構える必要はなかったようだ。本江邦夫教授がゼミ室に入り、少し雑談をした後に、授業が始まった。三限は美術史書を翻訳ではなく元の洋書で読む「原書講読」の授業だ。

この日はTATE publishing社が出版したRichard Humphreysの著書『Futurism』を読み進めていた。二十世紀初頭のイタリアで起こった未来派について書かれた英語の書籍だ。ゼミ生たちはあらかじめ決められた部分を訳して授業に臨み、一文ずつ順を追って翻訳していく。本江教授はそのたびに必要な指摘をする。まず、いい翻訳をした場合には、素直に褒める。発音が違えば指摘する。翻訳の内容に間違いがある場合は、あくまで正しい翻訳をするためのヒントだけを伝える。ゼミ

とも発表時に他のゼミ生と資料を共有している様子だったが、情報共有とゼミ生同士で議論できるのはこのゼミの醍醐味だろう。発表が終わると本江教授から鋭い指摘や疑問が投げかけられる。それに対して即答できなくても書籍やネットの手段を用いて調べる。新たな疑問については発表者だけでなく全員で調べていたのが印象的だった。この授業で発表した研究内容をそのまま卒論へつなげる学生も多いという。

本江教授は「芸学生には自然体で美術と向

ミ生はとにかく自分の力で適切な翻訳をする努力をする。それでもわからなければ、ほかのゼミ生も一緒に考える。辞書も駆使する。過度な助言をせず自力での翻訳にこだわるのは、本当の英語力を身に付けてほしいという本江教授の願いの表れなのだろう。

醍醐味はやはり、時代背景の言及など、本江教授の豊富な知識を生かした深く多様なコメントを得られることだ。長年培われた本江教授の知識によるアドバイスを受けることで翻訳した文章の本質に触れられる。フランス



き合ってほしい」という。好き嫌いはつきりさせたくえで必要な知識を学び、好きなものを吸収していけば、ほかのものにも興味湧く。そうすれば自分が社会のセンサリーになり本能的に反応していくという。美術史設計ゼミのモットーは、「よく学び、学び、そして遊べ」。そうしてこそ美術と自然体で接することができるようになると本江教授は考えている。

取材・文・撮影・レイアウト＝長谷川裕子



中井康之 さん

作品が持つ『感情』をそのまま展示する

多摩美術大学に芸術学科が創設された時期に在学生だった中井康之さん。現在は国立国際美術館で学芸課長を務めている。長年にわたって数多くの展覧会を手がけてきた中井さんは、キュレーションにどう取り組んできたのだろうか。



「キュレーションは一種の表現ではあるが、学芸員が自我を主張する場ではない。作品を変に脚色するのではなく、作品を再解釈し、そのよさを最大限に引き出すのが私の仕事です」

国立国際美術館（大阪市北区）で学芸課長を務める中井康之さんは、展覧会の企画の立

案や制作を手がけるキュレーションについてこう考えている。芸術をプロデュースすることが一般に知られてきた近年、キュレーションにある種の「創造」と捉えている人が少なくない。その中で、中井さんは自身を、表舞台には立たない裏方と位置づけている。作品という主役がいるからこそ自分にも力を発揮

する場があると認識しているからだ。

中井さんは本学科を卒業した後、京都市立芸術大学大学院で美学や芸術学を学び、芸術への造詣を深めた。その後、兵庫県内の市立美術館での学芸員を経て、現在は国立国際美術館で学芸課長を務めている。三十年にもおよぶ美術館勤務の中で数多くの展覧会を手がけてきた中井さんが最も苦労したのは、国立国際美術館で二〇〇八〜〇九年に開催された『アヴァンギャルド・チャイナ―《中国当代美術》二十年―』だったという。中国の改革・開放や社会変化のありようを象徴する現代美術作品を紹介するのが展示の内容。インスタレーション展示や映像、パフォーマンスを含めて、方力鈞や曹斐など十数名の作品が並んだ。日本で系統的に中国の現代美術を扱ったのはこの展覧会が初めてだったので手探りの部分が多く、すべての作家と直接出品の交渉をしたそう。言葉の壁を隔てて作品の意図を汲み取り、再解釈して鑑賞者に伝えるのにどれほどの困難が続きまとうものなのか。想像するだけでも気が遠くなる。しかし、中井さんはこの展覧会を開いて、「実現した意味が大いにあった」という。いったいどんな「意味」があったのだろうか。

昨年から全国の国立美術館・博物館では、四ヶ国語対応が開始された。解説や作品リストだけでなく、音声ガイド、会場案内図も多言語化され、海外からの来場者を受け入れる体制を整えている。ここでの一番大きな課題が翻訳である。中井さんが勤めている国立国際美術館では、特に導入や解説の必要性が高い現代美術分野の作品を多く展示している。多くの美術館では展覧会に関する文章の執筆は学芸員が担当している。彼らは美術に関する専門的知識を多く持つが、一般に中国語や韓国語を精査することは難しく、これらの言

語に精通している者は美術に関する専門的知識が足りない。同館では、『アヴァンギャルド・チャイナ―《中国当代美術》二十年―』の開催が極めていい経験となり、多言語化にもとてもスムーズに対応できたという。

一つの展覧会開催に必要な準備期間は五年ほどという。中井さんは最近、再来年二月から開催されるフランスの現代美術家クリスチャン・ボルタンスキーの大規模な個展の準備を進めている。イタリア・ローマの現代美術館Nambaで開かれていたボルタンスキーの展覧会の下見に始まり、国内で予定している巡回館担当者との合同会議、パリでの作家本人との打ち合わせなど、三年ほどの準備期間を経た今も、やるべきことは山ほどあるという。そして、たくさんの苦労は、展覧会の開催という形で報われる。



パリにてクリスチャン・ボルダンスキーと（写真提供＝国立国際美術館）



北京にあるジャン・ファンのアトリエ風景（写真提供＝国立国際美術館）



2012年に国立国際美術館で開かれた『宮永愛子：なかそら―空中空―』展に出品されたある作品は12万枚の金木犀の葉を素材としており、会期が始まった日の早朝に作品が完成したそう。一晩をかけて制作し、完成とともに朝陽の自然光が射し込んだ瞬間はあまりにも崇高で、「陶酔を超える感動があった」と中井さんは言う。多くの来館者に見てもらおうことと同様に常に新しい表現を探る美術の誕生に立ち会うのは、学芸員の大切な仕事なのである（写真提供＝国立国際美術館）

「現代美術作品は『感情』を持っている」と中井さんは言う。その感情に変に脚色を加えず、より多くの人にありのままを伝える試みの中では、図録制作も大きな課題である。図録は画集の役割を果たしつつ展覧会の開催によって明らかになった美術界の動向や新発見にかかわる論考を世の中の人々に知ってもらい、後々の資料にもなる貴重な媒体だ。中井さんは信頼あるグラフィックデザイナーにレイアウトや造本を任せっきりにせず、デザインに自ら携わることもあるそう。『アヴァンギャルド・チャイナ―《中国当代美

術》二十年―』展の図録では光沢紙のうえに独特なフォントを載せた。一般的な図録よりかなり小さなサイズ感が特徴的なのは、二〇〇七年に開いた『藤本由紀夫展 十／一』の図録。昨年に秋に開催された『態度が形になるとき―安斎重男による日本の70年代美術―』展の図録では、安斎重男さんの作風に合わせたモノクロームのトーンを基調にした。図録へのこだわりも、学芸員の醍醐味であることがよく分かる。

取材・文・撮影（*）・レイアウト＝黄夢圓

（なかい・やすゆき）1959年生まれ、本学科卒業後、京都市立芸術大学修士課程卒業。西宮市太田記念美術館（兵庫県）での勤務を経て国立国際美術館の学芸員に。現在同館で学芸課長を務めている。これまで企画した主な展覧会に『もの派―再考―藤本由紀夫展―十／一―』『アヴァンギャルド・チャイナ―《中国当代美術》二十年―』がある。

美術史家、北見工業大学准教授

野田由美意 さん

ことばとイメージの関係を追求し、
パウル・クレーにたどり着く

本学科の大学院修士課程を修了した後、スイス・チューリヒに留学した。
パウル・クレーの研究に本腰を入れるためだ。
文字絵の研究成果は書籍になった。
北海道の大学で教鞭を執るようになった近年は、
ナチスと美術の関係の研究にも力を注いでいる。

二〇一五年四月から、北海道北見市の北見工業大学で西洋美術史とドイツ語を教えている。近年特に力を入れて研究しているのが、デュッセルドルフを中心に、ナチスが当時のドイツの美術界にどんな影響を与えたか、である。たとえば、スイス出身でドイツを拠点に活動していた画家、パウル・クレーは、一九三三年にナチスが政権を握ると、教授として勤めていたデュッセルドルフ芸術アカデミーを追われ、故国に「亡命」することになった。ナチスはクレーのみならず、モダン・アーティストたちに「退廃芸術」の烙印を押し、彼らを迫害した。一八七一年のドイツ帝国成立以来、ドイツの美術界は、ヴァン・カンデンスキーやフランツ・マルク等のモダン・アーティストと旧来の画風に拘泥する保守層が対立を生んでいたという。ナチスは保守層を支持し、モダン・アートを積極的に排斥したのだ。

その結果野田さんは、美術と政治の関係に目を向け、いくつかの論文を書いた。たとえば二〇一六年に発表した「ナチス時代にお

る『若きライナント』の画家たちの芸術活動について」は、戦前のドイツで結成された芸術家グループ「若きライナント」に着目し、美術界にも大きな影響力を持ったナチスの政権下でどんな動きをしたのかを三人の画家を例に取って検証し、芸術と政治との関係を問うた論文だ。

しかし、野田さんはなぜナチスと美術界の関係に目を向けるようになったのだろうか。

野田さんは、北海道で教鞭を執る前に非常勤講師として教えていた多摩美術大学や上智大



チューリヒ市街風景。右奥に見える緑のドームのある建物が、野田さんが通っていたチューリヒ大学

（のだ・ゆうび）一九七一年生まれ。多摩美術大学大学院修士課程修了。スイス政府奨学金を給費され、チューリヒ大学哲学部美術史学科に留学。成城大学大学院博士課程後期修了。博士号（文学）を取得。成城大学文芸学部、多摩美術大学美術学部等非常勤講師を経て北見工業大学准教授。主要論文「パウル・クレーと舞踊―第一次世界大戦勃発までに描かれた踊る人物線描画を中心に」『鹿島美術研究』年報第二号別冊、二〇〇五年（二〇〇六年、財団法人鹿島美術財団「優秀者」など。著書に『パウル・クレーの文字絵―アジア・オリエントと音楽へのまなざし―』（アルテスパブリッシング）。

ことばとイメージの関係」に興味を持っており、平出隆教授のゼミに所属していた。卒論のテーマには、泉鏡花を選んだ。文学の世界でイメージを表現している点に大きく心が惹かれたからだ。「泉鏡花の小説を読むと、すぐにイメージが浮かぶ」と野田さんは言う。幻想的な世界をまさに「描いた」作家だったのだ。たしかに『夜叉ヶ池』『高野聖』などの小説は、すぐにでも映画になりそうなほど豊かなイメージを読者に与える。クレーを修士課程のテーマにしたのは、絵画の世界でことばとの深い関係を持った作家だったからだ。クレーのさまざまな絵画を美術館や画集で見、関連する文献を読んでいると、今度はクレーとアジアとの関係が浮かび上がってくる。調べてみると、クレーは江戸時代の浮世絵師、葛飾北斎の作になる『北斎漫画』の模写をするなど、ジャポニスムの画家としての一面を持っていた。さらには、中国の抒情詩集を自分の作品の中に取り込んでいた。文字のような絵も多く描いていたクレーに、野田さんはどんなのめり込んでいった。そして、一九九九年九月、クレーの故国であるスイスのチューリヒ大学に留学するのである。学部生時代はフランス語を履修していたが、クレー研究を行うためにはドイツ語の習得が必須だった。修士時代から文献を読むた



野田さんの著書『パウル・クレーの文字絵―アジア・オリエントと音楽へのまなざし―』（2009年、アルテスパブリッシング）

めにドイツ語を勉強していたが、チューリヒ大学で研究生生活を送るためにはより高度なドイツ語の能力を必要とした。留学前から語学学校に通い、現地の大学に入る語学力を身につけたという。凄まじい情熱である。

世界有数のクレーの専門家であるヴォルフ・ゲルステン教授のもとで二年半ほど、薫陶を受ける。その成果は、博士論文とそれに基づいた著作になった。二〇〇九年に出版された『パウル・クレーの文字絵』（アルテスパブリッシング）である。たとえば、『かつて夜の灰色から浮かび上がった 色彩文字』という絵画作品で、クレーはアルファベットで書いた一篇の詩を、銀色に塗った紙を貼り付けた部分を挟んだ画面の上下に敷き詰め、生まれた間隙にさまざまな色彩を配した。こうした作品は「文字絵」と称され、野田さんはクレーの一連の「文字絵」について多くの例を取り上げ、ことばとイメージの関係を追究したのである。

北見工業大学は日本最北の国立大学だという。「秋になると、もう寒いですよね」とにこやかに話していたが、その奥に潜む情熱には北海道全域をも温めてしまいうような勢いを感じた。

取材・文＝藤井奈穂

東急文化村運営事業推進部販売企画室ギャラリー（Bunkamura Gallery）

川田麻由 さん

出版・執筆の経験をギャラリーの仕事に生かす

本学科を卒業後、若者の街、東京・渋谷のBunkamura Galleryに勤める川田麻由さん。ギャラリーは美術館とは異なり、作品販売の場所である。川田さんはここで販売や広報の仕事を多く担当している。原点は在学時に取り組んでいた出版・執筆活動にあったという。



若者の街として有名な東京の渋谷。賑やかな駅前から文化村通りをまっすぐ進むと、東急百貨店本店のすぐ先に美術館やコンサートホールを集めた施設、Bunkamuraが見えてくる。表通りの喧騒からは想像できない落ち着いた空間が広がる1階メインロビーフロアにあるのがBunkamura Galleryだ。川田麻由さんは、そこで熱心に来店客に美術作品の紹介をしている。

取材時に開催されていたのは、西美公二展2017『北極の天空に輝くオーロラと古代遺跡』（昨年十月六日～十七日）。西美さんは、パリに住む日本人作家である。ギャラリー内には西美さんが北欧のオーロラに想を得て表現し

たという青と緑を基調にした幻想世界が広がり、静謐な雰囲気包まれていた。来店客は作品を鑑賞しながら、どれをわが家に持つて帰ろうかと頭を悩ませている。鑑賞を目的とする美術館とは異なり、ギャラリーはあくまでも美術品を「買う」場所である。だからなのか、川田さんの作品解説を聞いていると、作品の面白さはもとより、自分の家の壁に掛けたときの喜びまでが伝わってくる。

「洞窟絵画に着想を得た今回の作品では、パルプをこねてキャンバスに載せることで、岩の質感を演出している。これにより、岩石とオーロラの重層感が表現される。また、全体的な青や緑の中にカラフルな点が存在し、

奥行きを演出している」

この重層感や奥行きから、鑑賞者は近くで見たとときとひいて見たときとで大きな差を感じるのである。さらに、西美さんの作品はどれもキャンパスの緑まで描かれていた。そしてどれも額縁に入れられることなく展示することで、作品そのものに広がりを出すことができるという。一般的な長方形のキャンパスのほかに、円形のキャンパスに描かれた作品もあった。これらには天地がない。空を見ているイメージを付与したそうだ。それゆえ購入客は、好みに沿って自由に天地を決めることができるという。「買う」人々を対象とするギャラリーならではの説明だ。

実物の作品についてひとしきり説明した後、川田さんはこの展覧会の招待状を見せて、印刷された作品と実物がいかに違うかを話してくれた。

「実際の作品を見るまで、本物の質感は分からない。だからこそギャラリーに足を運んでもらう必要がある。そのための広報活動に力を入れています」

企画展の準備は通常二人で行うという。この展覧会では川田さんは担当ではなかったため、主に販売する上で必要な知識を準備したそうだ。

取材当時川田さんが担当していたのは、昨年十月に開催された恒例のBunkamura Galleryオークションだった。四十四回目を迎えたというこのオークションでは五〇〇点以上のアート作品が用意され、ピカソやシャガール、草間彌生など国内外の有名アーティストの版画などが幅広く扱われた。川田さんは主にプレスリリースの制作やホームページに使われる概要文の作成や案内状のデザインを担当したそうだ。オークションのコンセプトをわかりやすく伝える一方で、作品のイメージ



西美公二展 2017『北極の天空に輝くオーロラと古代遺跡』 招待状

を読む者が想像できるように絵を言葉にしていく。こうして、展覧会の魅力を多くの人に伝える。川田さんの仕事の醍醐味である。媒体や文章で人に何かを伝えることには、川田さんは本学科在学当時から積極的に取り組んでいたという。実は本誌『R』の執筆にも携わり、そればかりか、『R』という少々変わった媒体名の名付け親も川田さんだったという。（フランス語で芸術を「アール」と発音すること、多摩美内で学科ごとにある本学科のアルファベットの略記が「R」だったことの偶然の一致に由来するそうだ。もとより文章を書くのが好きで、自ら執筆した作品が『ゆきのまち幻想文学賞』に二度も入選した。

「自分の言葉で、多くの人に作品の魅力を伝え、それがギャラリーに足を運んでもらうきっかけになったら素晴らしいと思う」

川田さんの仕事の話を聞きながら、言葉の力を改めて実感した。

取材・文・撮影・レイアウト＝黄夢圓

かわた・まゆ）二〇一六年本学科卒業後、東急文化村運営事業推進部販売企画室ギャラリーへ。東京・渋谷のBunkamura Galleryで作品販売や広報に携わる。最近の担当は、『第44回入札制Bunkamura Galleryオークション』など。

私の運命の〇〇2

平出隆 教授

リワノワ著
『新しい幾何学の発見—
ガウス / ボヤイ / ロバチェフスキー—』

数学から詩の世界へ

リワノワ著『新しい幾何学の発見—ガウス / ボヤイ / ロバチェフスキー』。詩人、散文家である平出隆教授の「運命の〇〇」は、意外にも数学の本だった。この本に出合った頃の教授は、数学に夢中な少年だったという。数学の成績がよかったからというよりも、古代からの数学史に現れる人物の多彩さに心を奪われていたそう

この本を読んで特に惹かれたのは、ヤーノス・ボヤイと、ニコライ・イワノビッチ・ロバチェフスキーという二人の数学者がほぼ同時期にまったく違う場所で非ユークリッド幾何学の発見を果たすところだった。紀伊國書店発行の季刊誌「scripta」でもこのことを取り上げ、「子供の私は『発見』ということに非常に興奮したようだ。ああ、『発見』ということはこういう、思考の極致のような『証明』とともに行われるんだ、と身体で反応したことを覚えている」と語っている。

出合いの直後、二人の数学者へのオマージュのつもりで書いた文章が、国語の先生から「詩」として褒められたのをきっかけに、平出教授は文学の道へ進むことになる。そして数学とは対極にあるかに見える詩の世界に身を投じた今でも、数学的探究への敬意は常に心の中に確固として存在し続けているようだ。

（文＝平田瑞穂）

本江邦夫 教授

リルケ著
『マルテの日記』（大山定一訳）



原書から超訳の巧みさを知る

主に近代の西洋美術史を研究している本江邦夫教授。高校生の時代を振り返ると、数学と物理、そして詩と小説が大好きな青年だったそう

そのきっかけとなり、おそらく本江教授の文体の基本となった一冊が、リルケ著『マルテの日記』（大山定一訳）だ。この本は正式には「マルテ・ラウリス・ブリッゲの」という名前で発表されたライナー・マリア・リルケ唯一の長編小説である。あえて、「文体」といったのは、大山訳が現在でいう超訳に近いものであり、異文化との詩的かつ私的な“対決。から自ずと生じてきた日本語本来の「生理」ともいべき性質を十分に踏まえた創造的翻訳だったからという。後に、この本のドイツ語の原書を読み直した時、そのことに気づいたとのことだった。美術史における洋書の原書講読の重要性にしばしば言及する本江教授の原体験とも言え

（文＝平田瑞穂）

鶴岡真弓 教授

ヴォリンゲル
『抽象と感情移入』
（岩波文庫）

「北」のデザインに魅了される

鶴岡真弓教授は、小学生の頃からユーラシア大陸の民族文化に興味を抱いていた。「シベリアのシャーマニズムや、中央アジアの騎馬民族たちの造形美術が、古典的な丹精さとは逆の、デフォルメされた“装飾美術。に満ちていて魅了された」という。早稲田大学の学部生の時、現在のインド＝ヨーロッパ語族のヨーロッパ人も、ユーラシアの草原地帯を故郷としていることを知ったという。

19歳の時に、ユーラシアの大地を自分の足で歩こうと、ソビエト船で横浜港から日本海を越えて、旧ソ連のナホトカに上陸し、北アフリカまで旅をした。こうしてユーラシアの文化にどっぷり身を浸してきた教授が20歳の時に大学の図書館でふと手に取ったのが、ドイツの美術史家、ヴォリンゲルの著書『抽象と感情移入』だった。

同書では、ヨーロッパ美術の起源と傾向を、はっきりと「南北」に分け、南の古典古代ギリシャ・ローマの彫刻は、神を具象的な人間の姿で表し、表情があるため、「感情移入」の美術といえるのに対して、野蛮とされてきたアルプス以北のゲルマンやケルトの文明が展開したのは、「抽象」美術であり、そこには一個の人間の思考や感情を超えて培われた自然観や死生観が文様のデザインとして込められていることが語られていた。同書には、鶴岡教授が魅了されていた装飾美術のより深い謎を解くためのヒントがあったのである。漠然としていた思いが確信に変わり、鶴岡教授は、ケルトの装飾文化研究に没頭し始めたという。

（文＝平田瑞穂）

安藤礼二 教授

南方熊楠

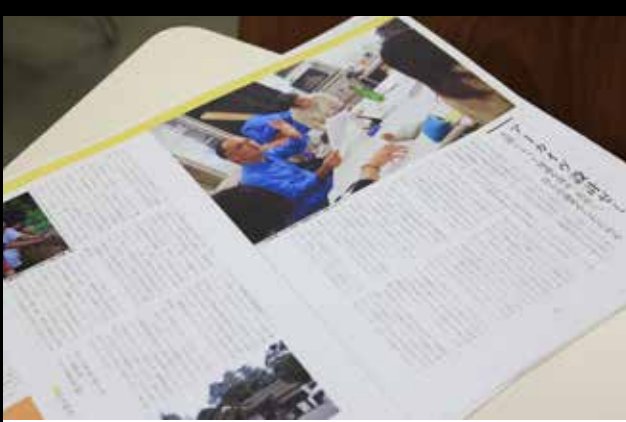
考古学から民俗学へ

安藤礼二教授が文芸評論家としての活動にいたることになったきっかけは、大学時代に南方熊楠に興味を持ち始めたことだったそう

各地を訪ね歩くフィールドワークを活動の基本の一つにしており、隠岐の島や沖縄など民俗学の対象になるさまざまな地域で調査を重ねてきた。本学でも熊楠をはじめ、柳田國男や折口信夫を取り上げた民俗学の講義をしているほか、ゼミでは学生たちと一緒に調査旅行に毎年出かけている。民俗学の巨人の全容を明らかにすべく2014年に出版した著書「折口信夫」は、サントリー学芸賞と角川財団学芸賞を受賞した。大学卒業後、文芸系の出版社で編集者を務めた履歴があり、群像新人文学賞の審査員を務めるなど文芸評論家としての活躍が著しい安藤教授だが、根幹には熊楠という存在と出合って以来の地道な調査活動があり、学生たちにも大きな刺激を与えている。

（文・イラスト＝鈴木勇佑）





原稿に間違いがないかどうかをチェックするために印刷された校正紙。誤字脱字を入念にチェックする



パソコン上で写真を貼り付け、原稿を流し込んで記事のレイアウトをする様子。Adobeの「InDesign」というソフトを使って作成する



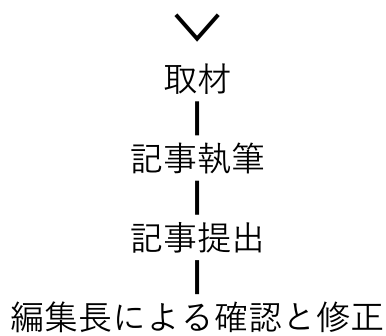
学生記者が書いた原稿の修正指導は、ワープロソフトの変更履歴を表示する機能を使って行われている。写真は、このコラムの原稿に編集長の小川敦生教授が赤字を入れたもの

印刷を委託している会社、八紘美術の印刷風景



取材の担当を決める学生たち。
取材する人物は、各学生、教員、研究室の助手たちがアイデアを出し合って決める

編集会議／企画の決定



完成原稿の作成

レイアウト 取材先による確認

校正

デザイン監修者による確認

印刷会社への入稿

色校正

納本

製本を委託している高村紙工所の製本風景。
『R』の印刷部数はおよそ2万部。製本を終えるのに2～3日程度かかるという



芸学生が自ら取材、誌面で本学科の素顔をあらわに

納本され、積み上げられた『R』

本学芸術学科には、小川敦生教授が担当する「言語メディア計画」という授業がある。本学科発行の雑誌『R』を一から制作するのが、授業の内容だ。

『R』は、学科の素顔を学生たちが自ら明らかにしようという自己確認の媒体だ。制作は、「学科の素顔を見せるためにはどんなコラムを作ればいいか」「どの授業を取り上げたいか」などを決める編集会議から始まる。二〇一五年度の授業を受けたのは主に一、二年生。以前『R』の制作に携わったことのある四年生も参加した。学生が提案した企画案の検討をする一方で、どのゼミあるいは授業を取材したいかといった希望を取り、担当を決める。取材の手法などは新聞および雑誌の記者や編集長を経験した小川教授が事前にレクチャーする。しかしうかうかしてはいられない。たとえば取材対象の卒業生はたいてい仕事に多忙ゆえ、ゆっくり構えているとタイミングを逃すおそれがある。学生記者たちは電話やメールでアポイントを取り、授業が始まって一カ月も経たないうちに取材に走り始める。

次はいよいよ記事の執筆だ。いつどこで何をといった「5W1H」を書くことや情景描写の具体的な方法などについてのレクチャーは受けたものの、実際に筆を執るのは難しい。苦勞して書き、提出すると、『R』の編集長でもある小川教授による原稿の修正指導が行われる。以前の出版界ではプリントされた校正刷りに赤ペンで指摘が書き込まれるのが普通だったという。『R』ではパソコン上の原稿ファイルに小川教授が修正を赤字で書き込む。もともと原稿が見えなくなるくらいに真っ赤な指摘で埋まって戻ってくることもしばしばだ。修正を学生が原稿に反映し、再度提出。ゴースサインが出ると「完成原稿」として、今度はレイアウト作業に移る。

レイアウトはパソコン上で専用のソフトウェアを使って行われ、記事の完成原稿と集めた写真を組み合わせながら誌面のイメージ上に貼り付けていく。同時に取材先や関係者などに原稿の内容に間違いがないかどうかを確認してもらう。さらに校正を重ねる一方で、デザイン監修者の須山悠里さんにレイアウトのチェックをしてもらう。問題がなければ印刷会社に入稿する。最後に記事の写真等の色が間違っていないかを確認する『色校正』を行ない、ようやく印刷会社での印刷が始まる。そして納本。こうして初めて多摩美術大学芸術学科発行の雑誌『R』が完成するのだ。

本学科が発行している雑誌『R』は、二〇一四年の創刊以来、本学科を卒業した人々や八人の専任教員が担当するゼミの内容を在学生在が記者として取材、執筆し、記事にしてきた。ここでは、その『R』がどのようにして作られているかを改めてリポートした。

編集後記

▼雑誌を作り上げる作業は容易に進むものでは決してなく、大学にいない時でもべ切り日のプレッシャーを強く感じていました。ゼミのように所属しているメンバーで制作活動が受け継いでいかれるものではなく、学科生が誰でも履修できる科目の中で、毎年変わる初めてのメンバーで同じ作業をすることの大変さがありましたが、この学科を内部にいる自分が『R』の制作を通して探求していくことは新鮮で、新たな発見も多く貴重な経験になりました。(青木真梨恵)

▼雑誌は読む人を想像しながら作ることが大切なのだと学びました。取材を快く引き受けて下さった教授やゼミ生の方に感謝いたします。拙い文章ではありますが、たくさんの方に読んでいただけるとありがたいです。(井上寿々子)

▼いたらない部分を支えていただきながら『R』を完成させることができました。ご協力、感謝致します。春からは実家で犬を飼うことになりそうで、それがとても楽しみです。(亀井えり)

▼取材や編集を通して、自分の知らなかった芸術学科の素顔を見つけることができました。文章の執筆や構成など慣れない作業がたくさんありましたが、なんとかできてホッとしました。(鈴木勇佑)

▼芸術学科の謎多き教授たちについて、少しでも知りたい、と思い「私の運命の〇〇」という企画を提案し、見事形にすることができました。教授たちの謎が解けたかはさておき、たくさん発見のある面白い記事に仕上がりました。(平田瑞穂)

▼取材をして記事を製作するなかで、自身の力不足と至らなさを思い知りました。小川教授、そして取材先の方々によるご指導のおかげで、今後の課題を自覚することができました。『R』編集の授業に参加できてよかったと思います。ありがとうございました。(藤井奈穂)

▼私は、展覧会設計ゼミと家村先生の私の運命の〇〇のコーナーを担当しました。初めて受験生のことを考える仕事に携わることができたので、本当に貴重な機会となり、自分にとってプラスにもなったと思います。本当にありがとうございました！！(宮越大空)

▼編集をするにあたって最も課題となったのは、情報の取捨選択・限られた字数に凝縮することである。また情報を読みやすい文体と語彙に変換し、読む上でのフラストレーションを最小限にして読者に届けること。情報流通の本質に触れ、思考できる授業課題であった。(大城美月)

▼入学前から本誌の存在を知り、学生主体で取材や編集を行うことに興味を持ちました。実際に履修すると授業ではなく仕事であるという風に意識が変化し、作ることの大変さを知ると共に読者としてだけでは得られない経験をすることができました。(加古ありさ)

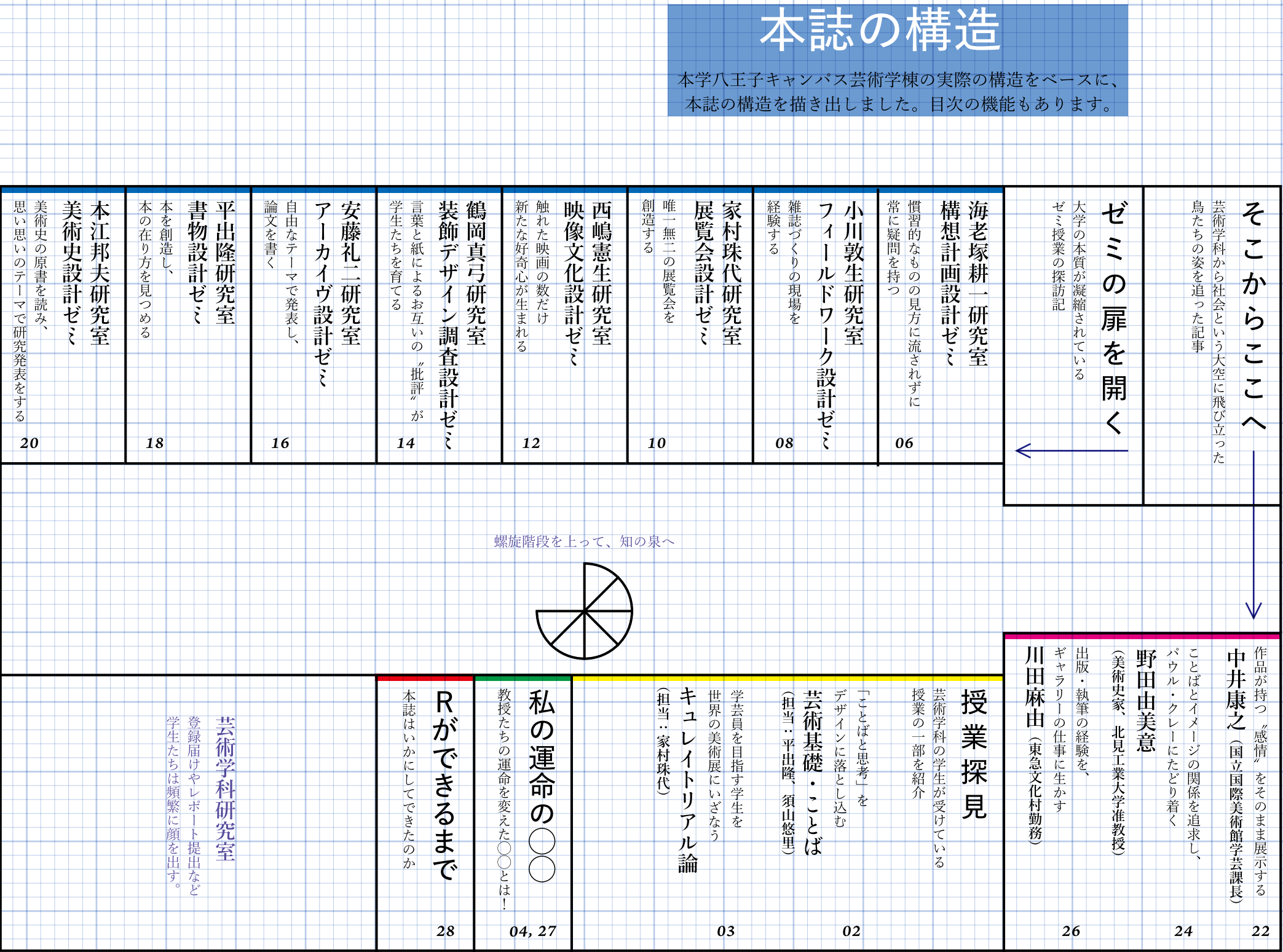
▼自分が学んでいる環境を取材し、客観的な眼差しをもって他人に伝える。『R』の制作に携わることで、私自身がここで学ぼうとした原点を見つめ直すことができました。卒業生の取材では先輩方の経験を伺ったり、普段入れない美術館の裏側に入れたり、戸惑いつつも貴重な経験をたくさんさせていただきました。(黄夢圓)

▼『R』の制作に関わることで、自分自身曖昧な認識で捉えていた芸術学科を見つめ直す機会を貰ったように思います。対話力や協調性など様々な自分の内面が磨かれた約半年間でした。ありがとうございました。(小林りの)

▼今回構想計画設計ゼミの取材、レイアウト、執筆を担当させていただきました。小川先生はじめ、構想計画設計ゼミの皆さんや同じ取材班の人のおかげでここまで形にすることができました。ありがとうございました。(鈴木萌花)

▼『R』の制作に携わり、一つの媒体を作り上げることの大変さを身をもって感じました。しかし、雑誌作りの基礎となる部分を、取材や記事の執筆を通して実践的に学ぶことができたので、いい経験になりました。ありがとうございました。(戸谷莉維裳)

▼本誌を制作している授業の修羅場ぶりは、出版社の編集部に負けない。学生たちはべ切りと闘いながら原稿を書く。実はべ切りこそが面白い記事を書かせてくれる神様。今年度も素晴らしい数々の降臨を見られてよかった。(小川敦生)



企画を立てて入学しよう！

企画力を問う「推薦入試」を実施

こんな展覧会を企画したい

こんな雑誌を発行したい

こんな映画祭を開きたい

こんなコンサートを制作したい

多摩美術大学美術学部芸術学科では、「推薦入試」を実施しています。

問われるのは、アート・プロデュースをする力です。

応募に際しては、受験生の皆さん自身が書いた「企画書」を提出してもらいます。

出願期間・合格発表等の日程の詳細は、4月以降に大学webサイト等で発表します。

出願に関する詳細については「2019年度学生募集要項」(7月下旬までにアップロード予定)でご確認ください。

問い合わせ先＝多摩美術大学美術学部芸術学科研究室
(電話：042-679-5627)